

# 1. 今求められる MRIのリスクマネジメント

## — 日常診療に潜むリスクとその対応

宮野由利絵 戸畑共立病院画像診断センター

MRI検査は現代医療には必要不可欠な検査モダリティであり、日本のMRI稼働状況は各国と比べ上位に位置づけされる。

また、当院は地域医療支援病院および地域がん診療連携拠点病院であるため、さまざまな被検者に対し、数多くのMRI検査を行っている。MRIは強い磁気や電磁波を発生する医療機器であるため、検査に関連するスタッフは細心の注意を払わなければならない、患者情報取得が困難で確認漏れがあった場合、医療事故に発展してしまう可能性がある。そのため、本稿では、当院で経験した近年のインシデント事例を情報共有するとともに、本事例の対策と当院のMRI検査に対する組織的な医療安全管理体制を紹介する。

### 医療安全面

当院のMRI検査に関連するスタッフの業務手順と役割を図1に示す。医師がMRI検査をオーダーする段階から検査入室に至るまでに、複数職種によって安全確認を行っている。また、医療技術の発展によって、MRI検査が禁忌となる医療機器に遭遇するケースも増えつつある。そのような医療機器を確認した場合は、患者には、MRI対応機器であるか確認が取れるまでは検査室内の入室ができない旨を説明し、検査は施行すべきではない。しかしながら、実際の現場では、安全性が不透明なケースは多々あり、その判断と責任は、MRI検査によって得られる利益と検査によって生じる可能性がある危険性を天秤にかけ<sup>1)</sup>、依頼医師に求められる。上記を踏まえ、想定外の体内金属や除去不可な体外金

属が存在した場合の当院の対応を図3に示す。

### インシデント事例の共有

今回は、近年に発生した持続自己血糖測定器のセンサ(図4)を装着した状態でMRI検査を施行した事例を取り上げる。

当該患者における問診票への記載は胸腰椎の椎体間固定術のみで、過去のX線画像からも体内インプラントの確認が容易であった。また、金属探知器の走査では上腕部近傍で反応を示したが、固定術に反応していると推測し、センサの存在に気づかず、MRI検査室内に患者を案内してしまった。同日オーダーされていた単純X線(全脊椎撮影)時に、上腕に写り込む小型機器を発見し、MRI検査室に持ち込めない持続自己血糖測定器のセンサであったことが判明した。

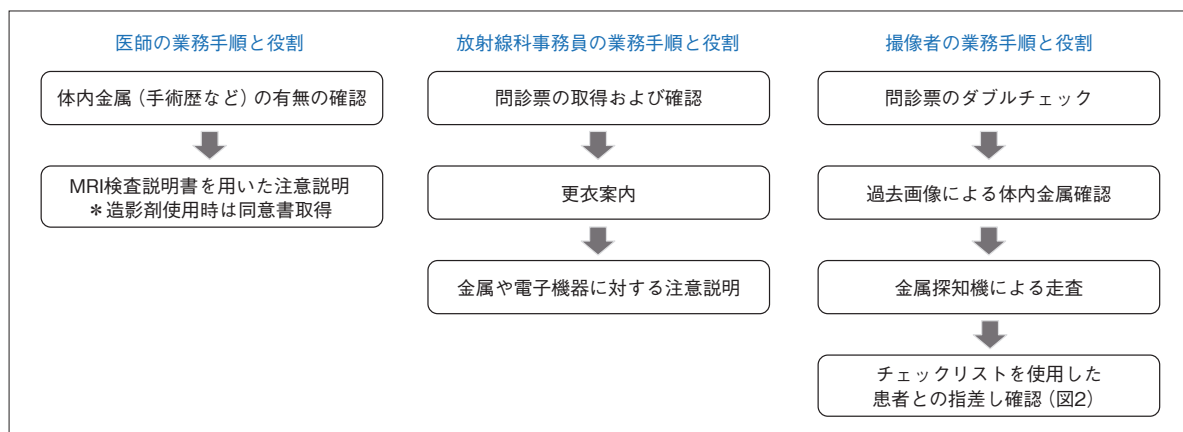


図1 MRI検査を施行するまでの流れ